



ボディ：微妙な光(色)を見極める能力＝ダイナミックレンジ最優先
できるだけ画素数の少ない高感度フルサイズセンサー

レンズ：繊細な光を効率良く捉える大口径で明るい、開放から異次元の描写能力を有したSIGMA製単焦点レンズ
SONY α7S Ⅲ 3台 + α7 Ⅳ 1台
SIGMA 14mm、20mm F1.4 DG DN | Art
SIGMA 15mm F1.4 DG DN DIAGONAL FISHEYE | Art
SIGMA 35mm F1.2 DG DN | Art



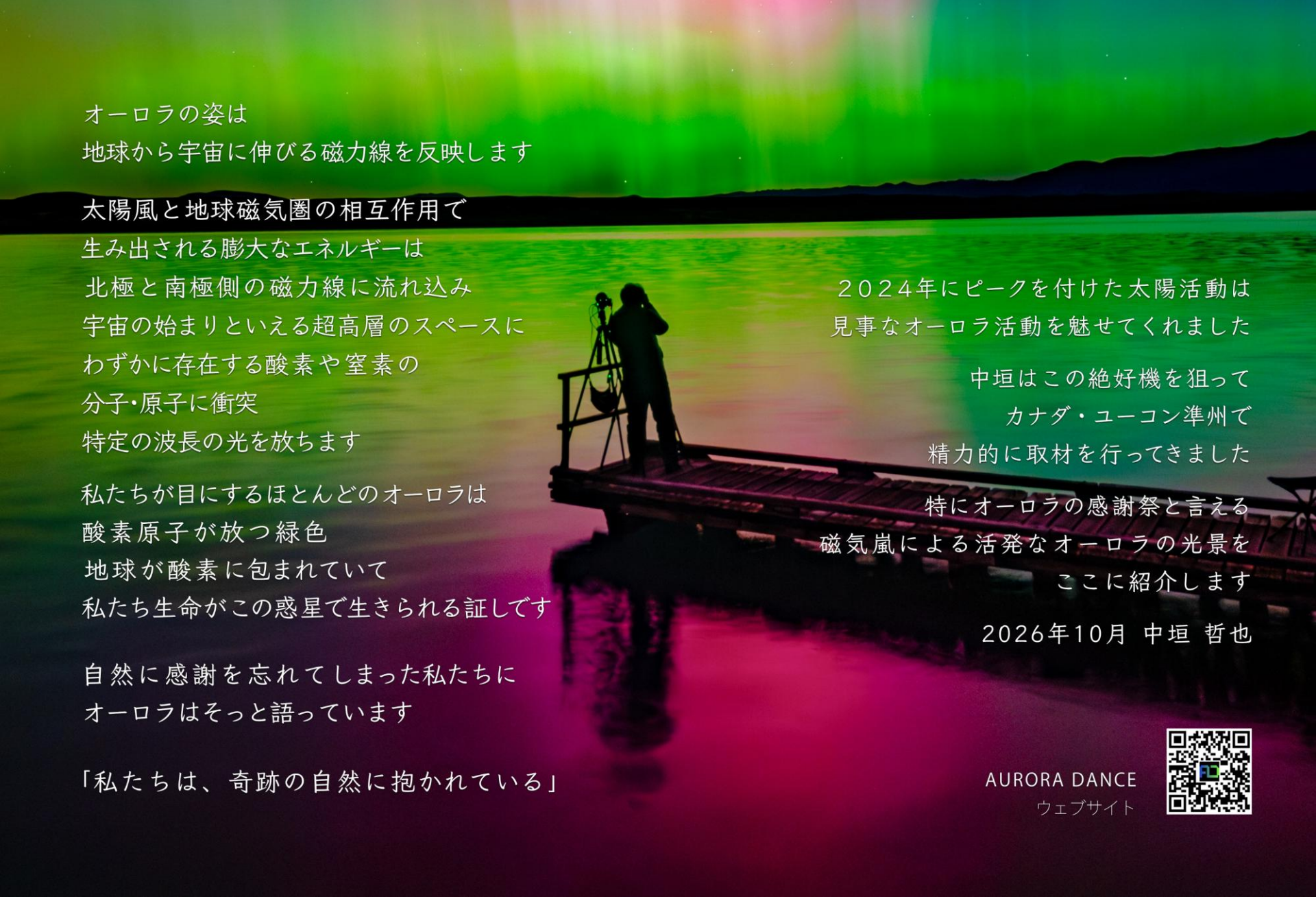
オーロラメッセンジャー
中垣　哲也

少年時代から身近な自然や星空･多様な音楽で感性を育む　2001年ニュージーランドの満天銀河の下で遭遇した赤いオーロラに導かれ以後北米極北など90回以上取材を重ね23年間の太陽活動の起伏と奇跡の地球を実感　診療放射線技師として札幌医大病院に23年勤務　道民医療に貢献　2007年春に転身　以後『奇跡の地球』を18年間全国へ伝えている　自然から授かったメッセージ･畏敬の念を映像と音楽で表現、人々の感性に感動的に響くよう追求し続けている



www.aurora-dance.jp
「オーロラダンス 中垣」で検索


過酷な宇宙環境の中で
唯一
青く輝く地球は
いのちにあふれた奇跡のオアシス
この惑星の豊かさの象徴として
北極と南極の両極に
緑の光の輪が輝いている



オーロラの姿は
地球から宇宙に伸びる磁力線を反映します

太陽風と地球磁気圏の相互作用で
生み出される膨大なエネルギーは
北極と南極側の磁力線に流れ込み
宇宙の始まりといえる超高層のスペースに
わずかに存在する酸素や窒素の
分子・原子に衝突
特定の波長の光を放ちます

私たちが目にするほとんどのオーロラは
酸素原子が放つ緑色
地球が酸素に包まれていて
私たち生命がこの惑星で生きられる証しです

自然に感謝を忘れてしまった私たちに
オーロラはそっと語っています

「私たちは、奇跡の自然に抱かれている」

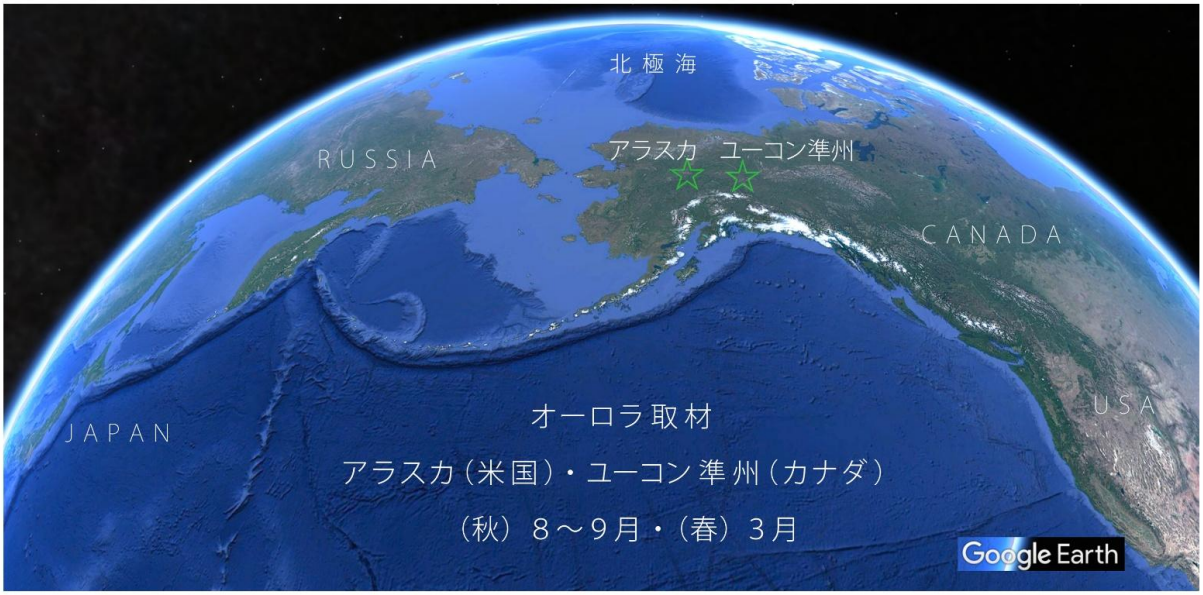
２０２４年にピークを付けた太陽活動は
見事なオーロラ活動を魅せてくれました

中垣はこの絶好機を狙って
カナダ・ユーコン準州で
精力的に取材を行ってきました

特にオーロラの感謝祭と言える
磁気嵐による活発なオーロラの光景を
ここに紹介します

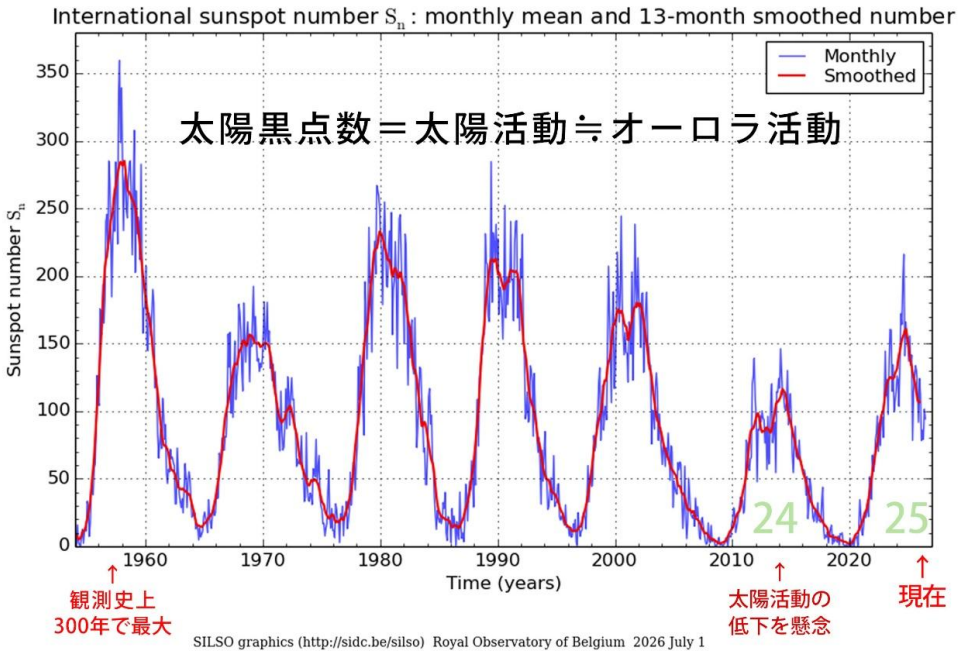
2026年10月 中垣 哲也

AURORA DANCE
ウェブサイト



予想より元気だった太陽活動

２０２４年頃をピークとする第２５周期太陽極大期は
当初の専門家たちの予想よりも遥かに活発でした
極大期には黒点が増えフレア（爆発現象）が多発します
その際、コロナ質量放出（プラズマの爆風）を伴い
黒点から解放された強力な磁場すらも地球に向かって来れば磁気嵐に発達し
地球の両極で発生するオーロラ活動に反映され
著しく活発になる可能性があります
地磁気の嵐はオーロラの感謝祭となり
私たちを興奮させてくれるのです



私たちは太陽の大気の中に生きている



我らが地球を含む太陽系は太陽の大気の中にある。
太陽から100万度の熱い大気（コロナ）が常に吹き出し、太陽の重力を振り切って
宇宙空間に飛び出したプラズマ（太陽風）は猛スピードに加速され、地球めがけて吹きつける！

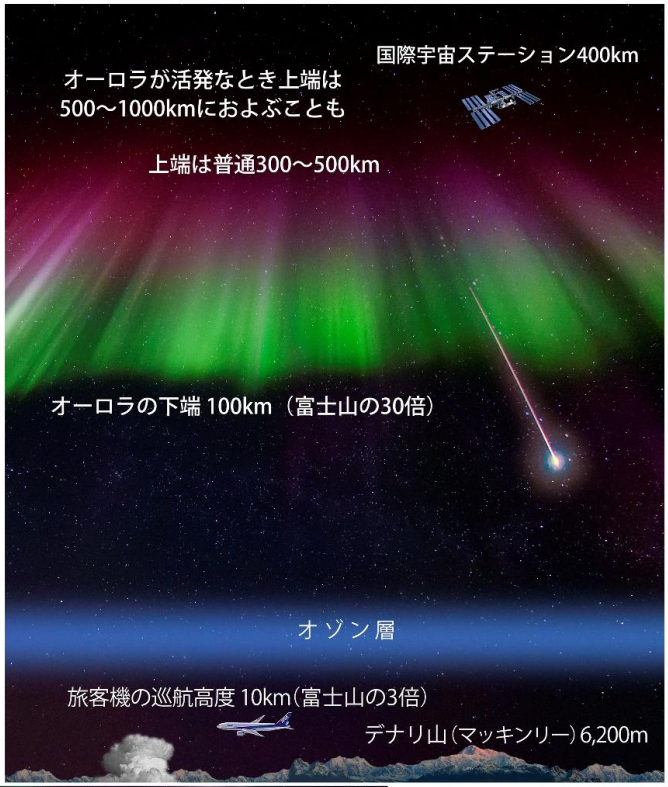
「100万度のコロナを見た！」

2009年7月、よりによって記録的な大雨の中、私は鹿児島港をフェリーで出航、屋久島沖へ向かう。外洋は荒れて、北海道人が体験したこともない高温多湿と内蔵が出てきそうなうねり、なにより絶望的な天候で気分は最悪だった。皆既日食の時間が迫ってくるが、鉛のような雲が立ちこめ、太陽なんてどこにいるかも見当もつかない。そしてその時が迫ってくると、あたりが急激に暗くなってきた。時計を見る。あー、もう始まる。あきらめかけた瞬間、雲に切れ目が現れ、世紀の天体ショーが始まった。地球と太陽の間に、ぴったりお月様がハマった！今から7年前の出来事だが、そのドラマは鮮明に脳裏に焼き付いている。それは太陽をまとう100万度のガス(コロナ)と、鮮やかなピンク色のプロミネンス(紅炎)だ。"オーロラの種"を自分の感覚で認識出来たことは、オーロラ業を営む私には感慨無量のビッグイベントだった。

「我らが地球は、太陽の大気の中に存在している！」

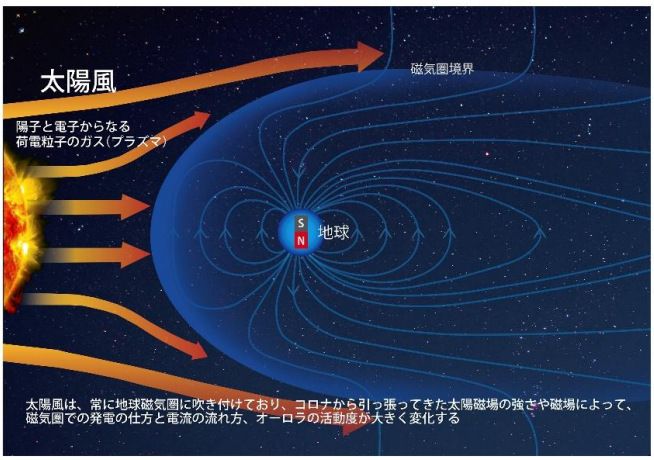


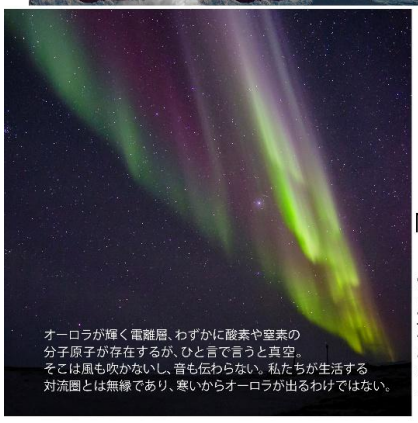
太陽という重い星の重力を振り切って自由になったコロナは加速され、太陽風（荷電粒子）というプラズマの流れとなり、普通でも秒速400kmという猛スピードを伴って太陽系の果てを目指して旅に出る。フレアという爆発によって勢いよく飛び出したなら、スピードはさらに速くエネルギーも大きくなる。肝心なことは、太陽風がふるさとを飛び出す際に「太陽磁場をもはぎ取って彼方へ拡散していく」こと。太陽系全体は太陽磁場を抱えたプラズマの嵐が吹き荒れる過酷なスペース。我らが地球は、生命には過酷過ぎる太陽の大気の中＝死の世界に存在している。



「地球に乗っかっている私たち生命は大丈夫なのか？」

心配ご無用。地球内部でマントル（金属）が対流、発電機になり電磁石の体を成すことで地磁気を持ち、地球のまわりの宇宙空間には磁力線が存在磁気圏という安全地帯が形成され、危険因子が容易に飛び込んでこない。なにより地球は大気に包まれていて「磁気圏と大気という生命のバリア」によって守られているのだ。私たちは過酷な宇宙の奇跡的なオアシスに生まれそのありがたい自然に生かされていたのだ！





オーロラが輝く電離層、わずかに酸素や窒素の
分子原子が存在するが、ひと言で言うと真空。
そこは風も吹かないし、音も伝わらない。私たちが生活する
対流圏とは無縁であり、寒いからオーロラが出るわけではない。

「太陽と地球のコラボレーションがオーロラを輝かせる」

放射線だらけの危険な宇宙と、私たちを守る地球磁気圏との「せめぎ合い」で起きていること、言い換えると太陽から数日をかけて旅をしてきたプラズマ流が地磁気と相互作用を起こし発電するが、世界最大級の発電所のおよそ1,000倍の膨大なエネルギーがオーロラを輝かせる電源となる。太陽と地球のコラボによる発電システムは、人類がどんなに進化したとしても到底及ばないほど壮大で、とてつもなく美しく神秘な輝きに昇華する。

「酸素が輝く奇跡の惑星」

宇宙の発電所で生まれた大電流は磁力線に誘導され、地球に磁力線が通る北極と南極の両極側に流れ込む。電離層という超高層以上で、わずかに存在する酸素原子に衝突する。エネルギーを得た酸素原子は励起状態となるが、居心地の良い元（基底状態）に戻るときに、得たエネルギーを特定の色の輝きとして放出する。地球に輝く酸素原子が放つ緑と赤いオーロラの色は、この惑星は植物にあふれ、酸素を含む大気に包まれ、生命が命をつなぐことができる、ありがたい環境を象徴しているのだ。オーロラが筋になって宇宙に伸びる様子は、磁力線が光って見えているようなものだ。我らが地球は大気に包まれ、人には感じないが地磁気というバリアに守られ、私たちは奇跡の惑星に生かされている・・・それがオーロラが私たちに語りかけるメッセージだ。